

ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期報告
(2008 年 1 月～3 月)

小山 佐和

< 目 次 >

はじめに	1
1. ドイツ連邦レベル等での学術動向	1
♪1-1 DFG がリスクを伴う研究に対する支援を目的とした事業を開始	2
♪1-2 ドイツにナショナル・アカデミーが設立	2
♪1-3 DAAD が他の欧州機関と欧州アジア大学プラットフォームを設立	4
2. ボン研究連絡センターの活動	4
♪2-1 来訪&訪問、会議出席等	5
♪2-2 第 1 回 JSPS-DFG ラウンド・テーブル「気候システム研究」開催	5
♪2-3 早稲田大学 大野国際部長、御子柴ヨーロッパセンター長代理来訪	6
3. 今後の予定	7

はじめに

2 月 5 日に協同学術協議会 (GWK: Gemeinsame Wissenschaftskonferenz) の事務総長を訪問しました。その際、2 月 18 日の会議に於いて、このたびの報告事項の 1-2 についても伺いましたが、同時に、大学と学外研究機関における協力の促進についても議題として挙がっている旨、伺いました。特にマインツ大学が MPG と共同で法人を設置することです。これにより、共同での教育研究はもとより、博士号の学位の授与も視野に入れて検討する旨うかがいました。

ドイツのエクセレンス・イニシアチブに於いては、大学と学外研究機関との協力強化が目指されましたが、それにより、いままで大学の名前に於いてのみ博士号の学位授与が認められていたものに、もとより大学との協力関係が深い MPG 始め、学外研究機関に於いても、その名前を学位記に付与することに関して要望が持ち上がっています。今回の報告に盛り込めませんでした。学位授与権をめぐる、今後も議論があると思われます。

1. ドイツ連邦レベル等での学術動向

♪1-1 DFG がリスクを伴う研究に対する支援を目的とした事業を開始

http://www.dfg.de/en/news/press_releases/2008/press_release_2008_05.html
(DFG プレスリリース No.5、2008 年 1 月 31 日を参照)

ドイツ最大の研究振興機関である DFG は、このたびリスクを伴う研究に対するより充実した支援を実施するため、新たな事業「ラインハルト・コゼレック・プロジェクト (Reinhart Koselleck Project)」を創設した。同事業は優れた研究者による革新的研究を支援するもので、一プロジェクト当たり 5 年間で最大 125 万ユーロ助成される。

卓越した業績と多大な可能性を併せ持つ研究者に重点を置いた事業であり、DFG 会長は、「非常に革新的で良い意味でリスクの高い研究プロジェクトを業績と可能性を両立させたすぐれた研究者が実施できるようにしたい。このような事業は、ほかの DFG プログラムに類を見ないものである。」とした。このようなプロジェクトは他の研究プロジェクトよりも予測可能性が低く、複雑性が高い特徴がある。

上記により、コゼレック・プロジェクトは採用までの手続き及び支援期間が DFG の他のプログラムと異なるものとなった。通常の個人補助金プログラムと異なる点は、経費が 3 年間のみでなく、最初から 5 年間の助成が保障されている点と、申請書の内容についても、詳細の計画でなく、5 ページ程度の計画書の提出とする点にある。研究者に大きな信用を供与することとなるため、対象となる者は、過去に非常に創造的な業績があり将来的にも多大な可能性を持ち合わせていなければならない、したがって、審査会に於いてはこの過去の業績と今後の可能性が評価の重点となる。

コゼレック・プロジェクトの第 1 回申請締め切りは 2008 年 6 月 1 日である。助成金額は 1 件あたり 50 万から 125 万ユーロである。大学に所属する研究者が対象であるが、大学外の研究機関における研究者は所属研究機関に於いては実現可能でない場合は申請可能であるが、審査員はそうであることを確認しなければならない。

コゼレック・プロジェクトは、DFG の個人助成事業の一つとして創設されたが、DFG の助成事業改革の一環として、より新しくより柔軟な事業として考案されたものである。Kleiner 会長は、DFG の事業改革は今後も継続するもので、DFG はキャリアステージの優秀な研究者を助成し、かつ事務手続きを最小化する努力をしている旨発言している。

なお、事業に冠されている、ラインハルト・コゼレックは、ドイツ (ビーレフェルト) の高名な歴史学者で、2006 年に亡くなった。

♪1-2 ドイツにナショナル・アカデミーが設立

dpa Nr. 47/2007, p.3-5
Leopoldina in Halle soll deutsche Nationalakademie werden
(dpa 2007 年 11 月 19 日号 3-5 ページ)
Forschung & Lehre 12/07, p. 712
Leopoldina soll "Deutsche Akademie der Wissenschaften" werden

(「研究と教育」2007 年 12 月号 712 ページ)
<http://www.gwk-bonn.de/fileadmin/Pressemitteilungen/pm2008-04.pdf>
(GWK プレスリリース No.4、2008 年 2 月 18 日)
を参照

協同学術協議会 (GWK: Gemeinsame Wissenschaftskonferenz) は、2008 年 2 月 18 日にザクセン・アンハルト州にあるハレ (Halle) のレオポルディーナ (Leopoldina) にドイツのナショナル・アカデミーとしての任務を委託することを決定した。Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften (BBAW) と acatech (German Academy of Science and Engineering) が共同し、また、各連邦集の学術アカデミーの代表とともに、レオポルディーナがこれを指揮代表する形になる。レオポルディーナに対しては、連邦：州＝8：2 で支援される予定である。

その役割は、学術的見地に基づく政策コンサルティングとドイツのアカデミーを国際的に代表することとなる。

政策コンサルティングに関しては、関係するアカデミーがレオポルディーナの指揮下において調整委員会を設置する。調整委員会は、レオポルディーナ、acatech、各連邦州アカデミー各 3 人ずつの代表者から形成される。調整委員会は、取り組む問題に関する合意に達するため、必要に応じて他のドイツの学術アカデミーからの監修も受け、政治および社会関連の諸問題にかかるステートメントを策定するためのワーキンググループを設置する。このステートメントは、レオポルディーナ、BBAW、acatech の議長部に、他の学術的評価を受けた上で提出される。

ドイツにナショナル・アカデミーを設立することは十年前から激しい論争が繰り返されており、特に、各連邦州の学術アカデミーが国立アカデミーを設立することに激しく異議を唱えていた。連邦教育研究相で、GWK 議長でもあるアネッテ・シャバーン氏は、これまで各連邦州のアカデミーの「連合」によるものを追及していたが、2007 年 11 月 16 日にドイツ放送で、上記の計画について発言しており、これにかかる協議を 2 月までに実施することとなっていた。

レオポルディーナが筆頭となることのメリットとして次の点が挙げられている。

- 1) レオポルディーナ、BBAW、acatech が協同することですべての学術分野がカバーされる。
- 2) 新規にアカデミーを設立するとなると、連邦と州が合意に達することはなかったと危惧されるが、レオポルディーナは既に国際的な政策コンサルティングに大きく貢献してきており、かつドイツのアカデミー関係を国際的に代表してきている。

レオポルディーナは、欧州最古のアカデミーである（世界最古と書いている報道もある。）。世界中に約 1,250 人の会員を有し、その中にノーベル賞受賞者は 30 人以上いる。

注）GWK は 2008 年 1 月に BLK(Bund-Laender-Kommission fuer Forschungsfoerderung 研究振興連邦州委員会)が改組されて新たに成立した組織である。16 州の教育研究大臣と財務大臣、連邦の教育研究大臣と財務大臣が学術研究政策、国際学術交流等について、経費上の裏づけを持って協議するための組織で、連邦教育研究大臣がその議長を務めている。

♪1-3 DAAD が他の欧州機関と欧州アジア大学プラットフォームを設立

<http://www.daad.de/portrait/presse/pressemitteilungen/2008/07912.de.html>

(DAAD プレスリリース、2008 年 2 月 27 日)

DAAD baut europaeisch-asiatische Hochschulplattform mit auf

(dpa Nr. 10 2008 年 3 月 3 日号 17 ページ)

を参照

DAAD は、新しいヨーロッパとアジアの大学のプラットフォームを構成するパートナーとして参加することとなった。EU 委員会は、DAAD とオランダの国際高等教育協力機関（Netherlands Organisation for International Cooperation in Higher Education (Nuffic) は、ヨーロッパとアジアの研究者及び政策決定者「EU-アジア高等教育プラットフォーム」の設立のため欧州大学連盟(EUA)の指揮下でコンソーシアムを形成することを決定した。このプラットフォームは、欧州とアジアの高等教育を共同で支援する EU-アジア・リンクプログラムの一環である。

2 年間のプロジェクトの中で、教育研究に関する情報交換及び協力を強化することが期待され、DAAD は 2 月 27 日これに参加した。とりわけ、高等教育の発展と協力強化のための好事例、両地域間の学生及び研究者の流動性の向上が支援されることとなる。2009 年末までに、欧州とアジアで一連のワークショップとコンファレンスが計画されている。高等教育機関運営問題、分権問題、大学院生の共同教育問題、（教育研究の）質の保障問題がそのアジェンダとなる予定である。

プラットフォームが発展するための秘訣のひとつは、新たなインタラクティブの情報・コミュニケーションポータルとしてのインターネットに DAAD が積極的に参加することである。更に、アジアで 2 つの大きな高等教育メッセを開催する予定である。うち、ひとつ目は 2008 秋に開催される予定である。

2. ボン研究連絡センターの活動

♪2-1 来訪&訪問、会議出席等

【1 月】

- 01 月 14 日 (月) 田中所長がデュッセルドルフ総領事官 総領事官邸名刺交換会出席
(於 デュッセルドルフ)
- 01 月 15 日 (火) 田中所長が在独日本大使館名刺交換会出席 (於 ベルリン)
- 01 月 16 日 (水) JSPS-DFG 共催「第 1 回ラウンドテーブル」開催 (～17 日) (於 ハンブルク)
- 01 月 23 日 (水) 小山、ガンター職員が H20 年度事業紹介活動及び同窓会活動「会員による会員の招待」のため、ボッフム大学往訪 (於 ボッフム)
- 01 月 28 日 (月) ケルン日本文化センター往訪 (於 ケルン)

【2 月】

- 02 月 05 日 (火) GWK (総合学術会議) Schulegel 事務局長往訪 (於 ボン)
- 02 月 12 日 (火) 田中所長、小山、シュルツ職員が AvH と外国人特別研究員 (対応機関推薦分) とフェオドア・リュネン・プログラムに係る打ち合わせ (於 ボン)
- 02 月 12 日 (火) 田中所長が AvH 選考会出席 (於 ボン)
- 02 月 18 日 (月) 早稲田大学 大野国際部長、御子柴ヨーロッパセンター長代理来訪
- 02 月 18 日 (月) 小山、ガンター職員、シュルツ職員が第 13 回日独学術シンポジウム開催地下見及び打ち合わせ (～19 日) (於 ロストック)
- 02 月 25 日 (月) 田中所長、小山、福島国際協力員、現地職員が同窓会「戦略拠点」説明会開催 (於 ボン)

【3 月】

- 03 月 05 日 (水) 在独日本大使館福井一等書記官来訪
- 03 月 05 日 (水) 野尻次期国際協力員が引き継ぎ出張のため来訪 (～7 日)
- 03 月 11 日 (火) 早稲田大学ヨーロッパセンター 御子柴センター長代理 来訪
- 03 月 19 日 (水) 在独日本大使館 氷見谷一等書記官、西井次期一等書記官 来訪
- 03 月 29 日 (土) 福島国際協力員が帰国

♪2-2 第 1 回 JSPS-DFG ラウンド・テーブル「気候システム研究」開催

JSPS ボン研究連絡センターは、ドイツにおける永年の対応機関である DFG と共催で、平成 20 年 1 月 15 日 (火) から 18 日 (金) まで、ハンブルクにあるマックスプランク研究協会の気象学研究所に於いて、日独の優秀な気象学関係の研究者 30 名を招き、第 1 回 JSPS-DFG ラウンド・テーブル「気候システム研究」を開催した。

参加した研究者は、全員が発表者及び議論参加者として、互いに刺激を与え合った。終了後のアンケートによると (回答率 60%)、回答者の 60%強が研究の方向性に明確な刺激を得たと回答し、また約 70%が今後もコンタクトを続けたいと考えているという結果となった。



この若手研究者の人選をはじめラウンド・テーブルの学術的オーガナイズは、東京大学サステナビリティ学連携研究機構(IR3S)/地球持続戦略研究イニシアティブ(TIGS) 統括ディレクター/教授 住 明正博士とMP I 気象学研究所長 Prof. Dr. Martin Claussen 博士が中心となって実行された。また各国のコ・オーガナイザーとして東京大大学院理学系研究科教授 山形 俊男博士及び北海道大学大学院理学研究科教授 見延 庄士郎博士並びに、MP I 気象学研究所 Prof. Dr. Jochem

Marotzke 博士が協力くださり、前述の日独のオーガナイザーと共に事業の趣旨をご理解くださり、この日独の 5 名の研究者からは本ラウンド・テーブルの開催に向けて惜しみない協力を賜り衷心より感謝している。

本会合のオープニングには、知日派研究者の一人で元MP I 総裁かつ元A v H総裁である Prof. Dr. Reimer Luest にも祝辞を頂戴し、J S P S 本部からは村田直樹理事から挨拶があった。D F G に於いては、Kleiner 会長がディナースピーチを実施、その後、在独日本大使館から森元 誠二次席公使からも祝辞を賜った。17 日には、ハンブルグ市科学大臣 Dr. Draeger 主催のレセプションが開催され、ハンブルグ市の学術交流への感心の高さが伺われた。

JSPS-DFG ラウンドテーブルという事業は、J S P S のドイツの対応機関であるD F G 会長の Prof. Dr. Kleiner の発議によるものである。ちょうど JSPS ボン研究連絡センターは、毎年テーマを決めて、日独学術協力の発展が望まれる比較的広い研究テーマを選び、両国の若手研究者が集中的に議論できる場として日独コロキウムを 4 回開催してきた経験があるため、このたび、この会合をD F G との共催とし、JSPS-DFG ラウンドテーブルという事業を開始した。

第 1 回目としては、多角的見解と新たな研究者どおしの繋がりの開拓を目的としたラウンド・テーブルに相応しいテーマとして、「気候システム研究」を選択した。これは、同テーマが科学的裏付けにしばしば疑問を投げられるほどの複雑性の高い学問分野であり、かつ 2007 年から 2008 年にかけて「環境問題」や「気候変動」は G8 サミットの議題としても取り上げられるほどに喫緊の対応を迫られる実学的側面も兼ね合わせていることから、考えられたものである。

このラウンドテーブルの様子については、DFG においても 1 月 15 日付けでプレスリリースされている。

http://www.dfg.de/en/news/press_releases/2008/press_release_2008_03.html

♪2-3 早稲田大学 大野国際部長、御子柴ヨーロッパセンター長代理来訪

JSPS ボン研究連絡センターは、ボンに於ける我が国の学術関係機関の一つとして、早稲田大学のヨーロッパセンターと長年の良好な関係を築いてきたが、このたび、同大学の

ボン大学への留学生に対するインターンシップ受入れに同意し、2 月 18 日に、早稲田大学側より大野国際部長(写真左)が、当センターより田中所長が出席し、覚書に署名した。また、同大学からは、御子柴ヨーロッパセンター長代理が同席した。当センターに於いては、4 月から 1 名受け入れを予定している。



このインターンシップ制度は、同大学ヨーロッパセンターとボン大学との提携により、ボン大学に留学中の早稲田大学の学生に、我が国からボン、ケルン、デュッセルドルフ等に進出している日系企業等に於いて一定期間の就業経験を積む機会を提供し、受入機関と本人のレポートを以て単位として認定される仕組みとなっている。学生は、前年 9 月に渡独したのち約半年間集中的にドイツ語を勉強したあと、3 月の一か月、4 月から 7 月の 4

か月、8 月の一か月のうちのどれか一つの枠組みの中でインターンシップを実施するものである。大学に通いながら「外国の日系企業等に於ける就業」という特殊な経験を単位認定を前提として実施するという方法は制度の有機的な連携の賜物であるが、これは、同大学の他の外国拠点に於いても類を見ない例とのことである。大学国際化の一つの事例として、当センターも協力しつつ、今後の展開を見守りたい。

▶2-6 その他の活動

- ・ 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- ・ 情報提供ホームページ” forschen-in-japan.de” の拡充作業
- ・ ドイツ語版ニューズレター (ルンド・シュライベン) 等の作成・配布
- ・ 各種照会、各種情報収集・調査、各種情報提供業務
- ・ 日本学術振興会事業の広報 (資料出展、HRK ニュースレター掲載ほか)
- ・ ドイツ訪問者に対する便宜供与、訪問アレンジ
- ・ 事業の審査・広報に協力する対応機関との協議
- ・ 第 13 回日独シンポジウム (2008 年 5 月開催) 開催準備
- ・ JSPS サマープログラム・プレオリエンテーション (2008 年 5 月開催) 開催準備
- ・ JSPS ボン研究連絡センター年次報告会 (2008 年 8 月開催予定) 準備
- ・ JSPS 事業説明会 (2008 年 10 月開催予定) 準備
- ・ DFG とのラウンド・テーブル (2008 年 1 月開催) 開催準備
- ・ DFG とのラウンド・テーブル (2008 年 1 月開催) 開催報告書作成

3. 今後の予定

2008 年

- | | |
|---------------|---|
| 04 月 01 日 (火) | 野尻国際協力員が赴任 |
| 04 月 14 日 (月) | 小山が業務打ち合わせ (於 東京) |
| 04 月 14 日 (月) | ガンター職員及びシュルツ職員が業務研修を実施 (於 ボン) |
| 04 月 22 日 (火) | 小山、ガンター職員が HRK 総会に於いて JSPS 事業エキシビションを開催 (於 イエナ) |

- 04 月 23 日 (水) 小山が AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション
(JSPS 外国人特別研究員を含む) 及び帰国者報告会出席 (於 ベルリン)
- 04 月 24 日 (木) 田中所長がセンター長会議出席 (於 東京)
- 05 月 16 日 (金) 第 13 回日独シンポジウム開催 (～17 日) (於 ロストック)
- 05 月 23 日 (金) 小山が CS3 準備会合出席 (～25 日) (於 アスマンスハウゼン)
- 06 月 03 日 (火) 田中所長が AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー審査会出席 (於 ボン)
- 06 月 05 日 (木) JSPS サマープログラムのための渡航前オリエンテーション開催 (於 ボン)
- 06 月 09 日 (月) 小山が Junior Expert Exchange Programme に於いて日本人研究者のためのドイツ研究渡航及びドイツとの共同研究に係る事業紹介 (於 ボン)
- 07 月 02 日 (水) DFG 年次総会出席 (於 ベルリン)
- 08 月 07 日 (木) AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション
(JSPS 外国人特別研究員を含む) 及び帰国者報告会出席 (於 ボン)
- 晩夏 「学振のタベ」 開催 (於 ボン)
- 10 月 07 日 (火) AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション
(JSPS 外国人特別研究員を含む) 及び帰国者報告会出席
- 10 月 16 日 (木) JSPS 事業説明会開催 (於 ボッフム大学) 及び JSPS ドイツ同窓会
による「会員による会員の招待」参加 (～17 日) (於 ボッフム)
- 秋または冬 第 5 回日独コロキウム開催